

佳作

自然からのプレゼント

鹿児島県 伊佐市立大口東小学校五年 椋山 真乃祐

一学期の終業式の日、ぼくが通う大口東小学校にプレゼントが届いた。それは、命の素晴らしさを教えてくれるプレゼントだった。

「おはようございます。」
毎朝くつ箱に立っていらっしゃる校長先生にあいさつをする、校長先生が

「ちょっと来てごらん。」
と声をかけてくださった。ついていくと、わたりろのかの柱に見たことのないせみが止まっていた。それは、全身がうすい緑色ですき通っているせみだった。せみとは思えないくらいきれいだった。おどろいていると、羽化したばかりだと校長先生が教えて下さった。

「すごい。きれい。」
思わず、声が出ていた。

「とてもめずらしいことで、校長先生も初めて見たよ。落ちて死んでしまうからさわらないでね。」
と言われたので、ぼくは近づきすぎないようにそっと見つめていた。初めて見たせみの羽化。からにしがみついて一生けん命羽をかわかそうとしている姿を見ていると、おねがあつくなかった。がんばれ。がんばれ。心の中で応援した。一度教室にもどり、朝のボランティアの前にまた見に行くと、今度は、羽の色が茶色っぽくなっていた。下学年もいっぱい集まっていて、みんな顔を近づけて観察していた。終業式が終わった時には、羽と体が茶色になって、ぼくの知っているせみにどんどん近づいていた。こんなに早い時間で色が変わっていたのでおどろいた。気付けば、学校のみんなも集合して、せみの成長を見守っていた。次に見た時、そのすてきなプレゼントは、空へと飛び立っていった後だった。

「せみは、約一週間の短い命だと聞いたことがあるけど、その短い命を生きるために、あんなにがんばって羽をかわかして、たった一人で飛び立っていくんだなあ」。ぼくは、空を見上げた。まぶしいくらいに青い空で飛びやすそうな空だったので、少し安心した。

「長生きしてね。」

そっとつぶやいた。

ふと理科の時間に、メダカがふかしたしゅん間を思い出した。メダカたちもすぐ小さな体で、たまごから出ようとしていた。メダカもせみと同じようにだれのカもかりずに自分の力だけで生まれてきていた。生まれてすぐ自分の力で泳ぎ始めていた。力強くかっこいい姿だった。

命がたん生して生きようとしているしゅん間を見ることができたぼくは、ラッキーだったと思う。命について考えることなんて、ほとんどなかったぼく。「命が生まれるキラキラかがやいている時間。そんなすてきな時間をわすれずに、命を大切にしないでいかないとダメなんだな。やっぱり命ってすごい」。素直にそう思っていた。大切なことを伝えてくれた、すてきな自然からのプレゼントだった。